

お産の「語り」

—看護のアートにおける表現に関する質的研究を通して—

谷津 裕子*

The Narrative on Childbirth by Parturient Women and Midwives : On the basis of Qualitative Research on Expression in the Context of Nursing as an Art

*Hiroko Yatsu

*The Japanese Red Cross College of Nursing

Interested in the concept of "Nursing as an Art", I conducted qualitative research on the field of the site of childbirth while registered as a doctoral student. I paid particular attention to "Expression" as a perspective from which to examine this art, observing words, movement, countenance, and tone, and so forth in exchanges between parturient women and their midwives. I conducted interviews on each occasion regarding what they each thought they had felt.

One startling conclusion from the survey was that in the sequential process of birth, both the parturient women and the midwives recounted stories of rich individuality, each becoming close with the other and growing through the stories they made (which were not necessarily limited to verbal communication).

It was a reliable person's presence - simply being nearby quietly - that the parturient women seemed to need most in the process of giving birth. At the very moment that the parturient women felt the midwife squeeze her hand in return, her despair changed into hope and her uneasiness into relief. The fact of waiting for the parturient women before "narrating a story" by linking hands was an undreamt-of "change from within."

This paper introduces stories from parturient women and their midwives, and considers the meaning of exchanging such stories at the site of childbirth.

*日本赤十字看護大学

キーワード

お産 childbirth

助産師 midwives

語り narratives

看護のアート nursing as an art

表現 expression

I. はじめに

—私の取り組んだ研究—

私は看護学研究科博士課程在学中に「看護のアートにおける表現—熟練助産師のケア実践に基づいて—」という研究に取り組んだ¹⁾。この研究では、助産師による妊産婦へのケア、特にその言葉や口調、表情、動作という表現によって織り成されるケアが、どのように看護のアートの現象を形作っていくのかという点に注目した。

本稿では、この研究を進めるなかで私がお産に場面に立会い、産婦と助産師にインタビューしてまとめたお産の「語り」を紹介する。そして、お産の「語り」が意味することについて考えてみたい。

II. 「看護のアート」とは

— “Nursing is a science and an art.” (Nightingale, 1893) —

お産の「語り」に入る前に、看護のアートという概念および本研究での表現のとらえ方について簡単に説明したい。

「サイエンスとアート」という言葉は、今では、大衆車のキャッチコピーに使われるほどメジャーな言葉となった。看護学の分野でこの言葉をはじめて公に向けて発したのはF. ナイチンゲールといわれる。今から110年以上も昔に著された『病人の看護と健康を守る看護』(1893/1974)の中でナイチンゲールは、病人の看護を指して「新しい芸術であり新しい科学でもあるものが、最近40年の間に創造されてきた」(p. 125)と述べている²⁾。

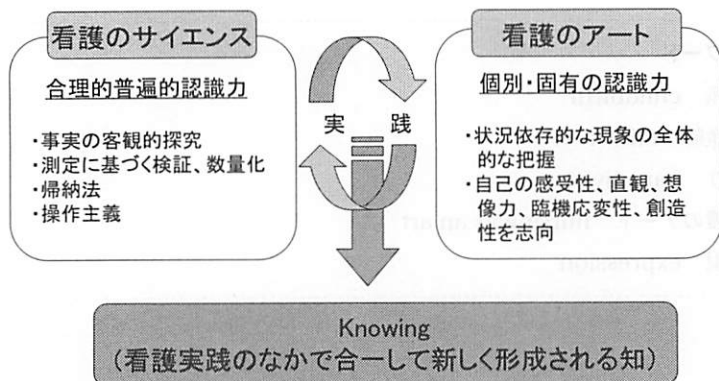


図1 先行研究にみる「看護のアート」の概念の性質

看護のアートという概念に関する日本の先行研究は少ないが、外国では比較的多くの研究が行われている。それらの文献を検討すると、看護のサイエンスとアートの性質に関してはおおむね一致した見解が出されていた(図1)。「看護のサイエンス」は対象者が直面している困難や行動のパターンを人間一般に共通する普遍的現象として理解し説明しようとするのに対し、「看護のアート」はそれらの困難や行動のパターンをその人だけに現れる固有の現象として理解する、という見方である。このように互いに背反する性質をもっていながら、看護のサイエンスとアートは別々の現象として確認されるものではなく、実践のなかで統合される。看護のサイエンスがもつ合理的普遍的認識力と、看護のアートがその適用過程を通して働かせる個別・固有の認識力は、看護実践のなかで合—して新しい知(knowing)を形成する。このように先行研究では、看護はアートとサイエンスの一つの統合体であり、看護のアートは、「看護の対象者が示す、還元主義的な科学的方法だけでは捉えきれない個別・固有な現象を理解し援助するために、看護者に必要とされる認識能力・実践能力」として、また、「そのような能力が発揮されることにより対象者に望ましい変化がもたらされる状況」として位置づけられていた¹⁾。

さて、看護のアートの概念をより詳しく調べてみると、いくつかのことが明らかになった。看護のアートの特徴を、芸術を意味するアートの特徴との比較を通して追究している研究がいくつかあるが、これらの研究では看護のアートの概念は主に「創造性」、「相互主観性」、「表現性」という概念によって特徴づけられていた²⁾。看護のアートの「創造的側面」には、おおよそ、創造的思考が新しい視野にものごとを位置づけ

ることであること、その要件として自分の視野についての自覚と未知なるものを体験するための勇気があること、などがあるとされている。また看護は、看護者と対象者との相互交流的、相互主観的な関係によって成り立つ活動であることから、「相互主観性」という概念も看護のアートの重要な構成概念であることが指摘されていた。さらに、看護のアートの「表現的側面」については、個々の対象者と関わるその場その時に看護者が抱く感情を対象者に向けて表すこと、そこに対象者の安寧への配慮、看護に対する理想や価値観の統合、看護者の個性が反映されること、などが指摘されていた。特に、看護のアートの表現的性質は、対象者との主観的な交流、自己認識と自己開示による創造的な探究の契機を含むこと、すなわち、創造性、相互主観性を含んだ包括的な概念であることから、看護のアートの本質的特徴として位置づけられていることが明らかになった。

臨床での助産実践や、家族を看取る経験をするなかで、私は実際に、この「表現」というものが、「看護のアート」の概念を成り立たせるうえで、非常に大きな意味をもっていることを知った。看護者と対象者は、互いの言葉や動作、表情、口調を介して自分の思いや不安、希望を相手に向けて表すことで、相手に自分の気持ちや自分がおかれた状況を理解させ、新たな関係性を生じさせていた。そうした意味において看護者と対象者の表現は、双方が相手を一人のかけがえのない存在として確かめ合うようにして真に出会い、心を通わせあうところの「場」とであると考えられた。

看護者と対象者が真に出会い、心を通わせる「場」としての表現を探究するためには、自分と他者、自分自身の内と外とがダイナミックに交わりあって展開される表現の性質を浮き彫りにするような、表現に関する本質的規定が必要とされた。そこで、本研究では、西田幾多郎と木村素衛の哲学的表現論に着目した。

西田と木村の表現論の特色は、人間を「形成的自覚的存在」、すなわちものを作り現すという行為を通して自己および他者との関係のなかで自己を形成し、自覚していく存在として把握する点にある。西田・木村の著作を貫く「形成」「表現」を中心とするモチーフは、決して芸術制作に限られた問題ではなく、個々のかけがえのない人間はそもそも「つくる」「あらわす」という行為のなかで生きており、その都度、自己への不満を定立させながら、さらに「つくる」「あらわす」という行為へと進むという存在することを示している。そのような意味において「表現」とは、人間の生きる営みの根本にあるものとして位置づけられていた。

また、西田・木村の表現論のもう1つの特徴は、人間の表現というものを単に「理

解の手がかり」として把握しないという点にある。看護者は、患者が示す言葉や動作から患者の気持ちや個性、患者がおかれた状況など様々なものごとを理解する。しかし患者の表現を通して何かを「理解」しただけでは、看護は成り立たない。患者の表現は、単に理解させる手段として存在するのではなく、看護者の心を揺るがし、看護者自身に何らかの内的な発動性を促すものであると思われる。そのような意味において、表現とは「自分の感情や考えを相手に伝える手段としてのみ捉えられるものではなく、自分が動きつつ相手に動きを与えるもの」³⁾(西田, 1933/2005, pp.219-220)であり、かつ「相手と共に何ものかをつくりあわすことによって互いの存在、関係世界を維持・発展させていくような意味をもつもの」⁴⁾(木村, 1939/1997, p. 8)であると考えられる。西田・木村の表現論は、看護のアートにおける表現の性質を探求する本研究にふさわしい理論であると考えられた。

こうして本研究では、西田・木村の哲学的表現論を理論的基盤におきながら、助産師による妊産婦へのケア、特に言葉や動作、表情、口調などの「表現」によって織り成されるケアが、どのように看護のアートの現象を形作っていくのかという点に注目した。そして、たくさんのお産の場面に立会い、妊産婦と助産師から、お産の「語り」を聞かせていただいた。

III. お産の「語り」

本稿で紹介するのはそのうちの2つ、AさんとCさんのお産にまつわる「語り」である。

1) Aさんのお産

(1) お産の経過

Aさんは、午後9時に破水感があり入院した34歳の1経産婦である。

深夜1時、5分間歇の陣痛が来始めた頃から、「もういや！死んじやいたい！帰る！」と訴え、4時過ぎには「キャー！」という絶叫が聞かれるようになった。

担当となったB助産師は、強ばった表情で身体を震わせるAさんを目見るなり、落ち着いた態度でAさんを胸に抱き寄せ、「大丈夫、もう怖くないよ、一緒にいるからね」とAさんの耳元で優しくささやいた。すぐにAさんは、子犬が親犬の懐に頬をすり寄せるような仕草で、B助産師の胸に顔をうずめた。Aさんは「痛い」「怖い」という言葉を呪文のように繰り返してはいたものの、表情は穏やかになっていた。B助

産師が「分娩室の中ならいくらでも叫べるから中に入ろうか」と誘うと、Aさんは「うん、うん」と積極的に同意し、二人は分娩室へと移動した。

その後、B助産師は、アロママッサージやイメージリーなどのリラクゼーションテクニックを駆使し、朝8時前、Aさんは無事元気な女児を出産するにいった。

(2) お産にまつわる語り

ここでは特に、午前4時頃、AさんとB助産師とが初めて対面してから分娩室に移動するまでの関わりに焦点をあてたい。

Aさんに初めて対面したB助産師は、その第一印象について次のように語っている。

「目が…すぎるような目、もう行かないで…絶対行かないで！そう訴えかけるような目で、すごいパワーで。そういう目で見られると、はっはっはく短く息を吸う>、この人ほっとけない、危ないんじゃないかって、切れる寸前じゃないかなっていう怖さがあった。」

産婦の「すぎるような目」から感じた「怖さ」を引き金にして、助産師は産婦のおかれた状況を共感的に理解し、その状況に即した対応の仕方を瞬時に判断している。

「一人目のお産の時の印象もあって、入院時から痛くなるのが怖いって言ってたし、旦那さんも（仕事の都合で）いなくて、（子宮）筋腫ももってるし。…不安も緊張もあると思うけど、それを少しでもリラックスさせるためには、彼女の言ってることとかやってることを決して否定しちゃいけない、とにかく包容する、彼女の総てを受け入れてるから何をしても大丈夫よっていうメッセージを自分から出してあげないとダメだと思った。」

B助産師は、自分の関わりには「親になった感覚で、子守りしてるような状況」を「演じる部分」が多分に含まれていたと振り返っている。「親が子をなだめるように」産婦のすべてを受容していく関わりの上、B助産師はAさんの心身の変化を全身で察知している。

「『抱きついていいよー』って言って抱っこしてる時に、（子宮）収縮きたら私にグワッと抱きついてきたんだけど、段々体の力は抜けてきた。最初の頃に比べたら、確実に間歇時はリラックスが違ってくるのが分かった。」

一方、Aさんは、B助産師の「包容力」ある対応に母親のイメージを重ね合わせ、そこに魔性の力を感じ取っている。

「Bさんはね、包容力があるし、何言っても許して下さる…すごい大きな人、肝っ玉母ちゃんに見える。彼女の包容力で私は魔法をかけられて、それにだまされだまされ、

出産にまでこぎつけることができたんですね。」

「魔法をかけられる」過程においてAさんは、B助産師に対する深い信頼感と感謝の念に基づき、分娩への自発的・能動的な意思を育んでいく。

「とにかく恐怖心がない？怖がらないでお産に臨めるようなもっていきかたをしてくれるっていうのはありがたい。分娩台にあがったときには、もうなーにがなんでも産もう！って思わせてくれる助産婦さん。ここまでつき合ってくれたんだから(中略)苦しくても本当に彼女のためになら産めるんじゃないかっていう気がして。」

2) Cさんのお産

(1) お産の経過

Cさんは、規則的な収縮が発来し入院した、29歳の初産婦である。

入院してからD助産師と出会うまでに既に3日間がたっており、長時間にわたる陣痛から、Cさんには疲労感や食欲減退などがみられていた。しかし、分娩自体には前向きな姿勢で、温浴、アクティブ・チェアにまたがる、マット上で四つん這いになるなどして、活動的に過ごしていた。

午後に入り、助産師学生から申し送りを受けたD助産師は、Cさんを訪室すると、Cさんのベッドに腰掛け、腰を高くした四つん這いの姿勢でウンウンうなっているCさんの腰をさする、肩をもむ、间歇時に横になるCさんの頭の下や下肢の間にクッションをはさむなどして終始付き添っていた。

ある時、側臥位になったCさんが、目を閉じたまま手探りするようにしてD助産師の手を掴んだ。D助産師が、即座にそのCさんの手を軽く握ると、CさんはD助産師の手をギュッと握り返した。陣痛がおさまりつつあるCさんは、顔をしかめ、肩をいからせたまま、「ふー…」と大きくため息をついた。D助産師は、Cさんの肩から首にかけてゆっくりと揉みほぐした。

その後も分娩はゆっくりと進行したが、夜間になってから収縮が徐々に強まり、日付が変わって約1時間後に元気な女児が誕生した。

(2) お産にまつわる語り

D助産師は、Cさんが自分の手を握ってきた時の印象を次のように語っている。

「助けて！先が見えないから不安だよ…一緒にいて、どうか離れないで！っていう声にならない悲鳴を聴いたよ。ふれあいを求めて自然に出てきてる手なんだなってスツと思った。」

Cさんの手が発する「声にならない悲鳴」は、辛い境遇に立たされた人間が欲する「守られている感覚」であるとD助産師は指摘する。

「経過が長くなって疲れてるし、精神的にも彼女だいぶまいってるっていうのが分かってたし、人間辛くなってる時期っていうのは、誰かに受けとめてほしいとか、抱っこしてほしいとか、守られたい感覚が出てくると思うから。(中略)辛くて守ってほしいっていう気持ちを受けとめる、少しでも楽になるんだったらどうぞ私の手に触れてっていう気持ちで彼女の手を握った。」

Cさんの手を握ったD助産師の手が、Cさんによって再び握り返された時に受けた複雑な思いを、D助産師は次のように述べている。

「やっぱり辛いんだなーって思ってこっちもホントに辛くなった。どうしたら彼女が楽になるのか、進められるなら進めるための手段を…って思う反面、この状況では為す手がないからね、自分のなかでもすごい葛藤があるんだよね。…でも一緒にいるよ、一緒に頑張ってるからねっていうのを、態度とか雰囲気でも相手にも感じてもらうことでリラックスしてもらえるように関わるって、すごい大切だっていうのを、Cさんみたいな経過の長いケースから教えられることがあるから、それをパッと思い出して、今のうちに少しでも体力を回復させたり減退させないために気力を保っていきうって思った。」

D助産師は、Cさんが握り返した手を通してCさんの置かれた厳しい境遇を再確認し、助産師自身、「本当につらくなった」と語っている。そして「為す手がない」自分に激しい葛藤を覚えつつ、「そこに一緒にいる」自分の存在の大切さを即座に思い返し、今後の関わりの焦点を新たにしている。

一方Cさんは、D助産師の手を握った時の気持ちをこう語っている。

「本当に、助けて！…っていう一心で。でもやっぱり子供と一緒になのかしら、ただ手を握ってもらっただけで安心するんですよ。もうその瞬間から全然気持ちが安定する。安定、安心するとこう…痛みが和らぐっていうか。気持ちの問題ってこんなに大きいのかと、その時本当に思いましたね。」

Cさんは、D助産師に手を握られた途端に「気持ちが安定」し、痛みや不安も和らぐことを実感しながら、D助産師に対して新たな気持ちを芽生えさせている。

「本当に気を許せるっていうのが主人だけだったんで、助産婦さんの存在は、私にとってもものすごく大きかったんだけど、この頃からだったと思います、助産婦さんにすべてを委ねる気持ちになったのは。本当にお母さんにすがりつく感じで、Dさんの

手を一生懸命握り返しました。…このあと段々、何でも気づいたことを全部、今こうなんだけど、ああなんだけどって、どんな些細なことでもDさんなら聴いてくれそうな感じがして。言葉じゃなくて、態度でつついししゃべり始めるっていうか<声を震わす>…。それを思い出すだけで涙が出てきちゃう<涙をこぼす>。」

Cさんは産後、D助産師との関わりにおける自分の変化を、次のような言葉で振り返っている。

「もうはっきり言って、頼れるっていう壁をはずしてくれたのが助産婦さん。あんなに甘えてる、すがってる自分をみたのって初めてだったんで、すごい意外だな、自分で意外な一面をみたなという感じがして。」

Cさんは、D助産師が自分の中にある「壁をはずした」と断言する。Cさんが差し出した手をD助産師が握ったことがそのきっかけになったとCさんは捉えているが、一方では、それまでの自分自身の生き方そのものが影響していると、Cさんは述べる。

「普段は人に甘える、頼り切るっていうかたちを自分にとってこなかったので…仕事の面でも何でも。いつも自分は独り立ちすること、自立して生きることが当たり前目の目標のようにして生きてきたし、子どもを産んでもそうだと思ってた。」

「自立」をモットーとして社会生活を送ってきたというCさんにとって、「人に甘える、頼り切る」というかたちの生き方は、自分にとって障壁のように立ちはだかつて見えたことと考えられる。しかし、D助産師との関わりによってその障壁は取り除かれてしまった。その出来事をCさんは驚きの目で受け入れている。

「そういう壁を取り除くっていうのは、ヘレン・ケラーとか、壁をつくってしまった子供を解きほぐすっていうのと似てて、すごい大変なことだと思うんですよ。でもそれをやり遂げてしまう時点でね、どうしてこの人、こんなに優しくいれるんだろう？ってビックリさせられる。自分のことじゃなくして、他人のことで、こんなに尽くして気持ちを考えてあげてっていう風に…。」

他者の「壁をはずす」ことは他者のために尽くすことであり、それは非常に大変なことだとCさんは指摘する。D助産師との関わりを通して「人に甘える、頼り切る」という初めての感情を抱いたCさんは、そこから自分のなかに母性の本能が開花したと語っている。

「産んでからは、自分のベビーちゃんに気持ちが和らぐ分、他の人に対しても優しくなったねとか言われたりする<照れたように笑う>。人に優しくなれるとか、甘えられるとか、他の人を愛おしく思えるとか、そういう自分のなかの変化をみてて、ああ

こうして母親になっていくんだなっていうのを実感しますね。でもその母性の本能っていうのは、たぶんあの壁が取り除かれてから開花したんだと思う。助産婦さんに教えられなかったら、きっといつまでも自分の殻の中に閉じこもってたと思う。」

IV. お産の「語り」が意味すること

以上のようなお産の経過とそれにまつわる「語り」が示すように、お産という一連の過程において、産婦と助産師は語り尽くせないほど豊かな、一人ひとり個性あるストーリーを形作っていた。

ところで、お産の「語り」というとき、そこには2つのものが存在しているように思う。1つは、お産の最中の「語り」、もう1つは、お産のあとの「語り」である。

まず、お産の最中の「語り」、つまり、お産のプロセスで産婦と助産師が言語的・非言語的なメッセージを交換することの意味について考えてみたい。

1) お産の最中の「語り」が意味すること

お産のプロセスにおける産婦と助産師の「語り」から、次のようなことが見えてきた。

新しいいのちをうみだす過程で、産婦が身をもって必要としていたのは、心の底から信頼できる人のプレゼンスーじつとそばにいてくれること一であった。AさんがB助産師の胸に顔を深くうずめたとき、あるいはCさんがD助産師の手を一所懸命に握り返したときのように、助産師とのかかわりを通して産婦が確かなプレゼンスを感じ取ったとき、産婦の絶望は希望へと、不安は安らぎへと、ダイナミックにその姿を変えていた。

興味深いのは、このようなダイナミックな変容がみられるときには必ず、産婦が示す表現や「語り」の意味を、感情豊かにくみ取る助産師の心の揺らぎが存在していた点である。

産婦を抱っこしたり頬ずりしたりするB助産師の包容の態度の出発点には、産婦の「すがるような目」から感じた「怖さ」、「ほっとけない、危ない」という助産師の切迫した激しい心の揺らぎがあった。またD助産師は、自分の手を握り返したCさんの声にならない悲鳴を聞いて「為す手が無い」自分に激しい葛藤を覚えつつ、「そこに一緒にいる」自分の存在の大切さを即座に思い返し、今後の関わりを新たにしていた。

この動揺や葛藤こそ、パニック状態や閉塞状況に陥っている産婦が直面している問題の本質を瞬時に把握する、助産師の気づきの源泉であったと思われる。産婦に望ましい変化をもたらす看護のアートの状況においては、助産師自身が、感情を伴った生身の人間として産婦と向き合っていることを自覚することが非常に大切ではないか。

そのように考えると、感情というものは問題解決過程において重要な役割を果たしているように思われる。『厳密な学としての生の哲学』という論文のなかで、板橋氏(2000, pp. 72-73)は、西田哲学の思索を指して、直接的に経験される非合理的なる生の事実が「単に論理を超えたもの」ではなく、むしろ論理性・合理性の根底でもあるという生の逆接を主題化し、説明することに向けられている、と指摘している⁵⁾。板橋氏の言葉を借りれば、直接的に経験される“感情”は、非合理的な生の営みでも、単に論理を超えたものでもなく、むしろ論理性や合理性の根底でもある、といえる。先に述べたように、看護のサイエンスがもつ合理的普遍的認識力と、看護のアートがその適用過程を通して働かせる個別・固有の認識力は、看護実践のなかで合一して新しい知(knowing)を形成するといわれているが、看護のサイエンスとアートをつなぐ要素として感情が重要な働きをする可能性が、お産の最中の「語り」を通して示唆された。

2) お産のあとの「語り」が意味すること

もう1つのお産の「語り」である、お産のあとの「語り」にはどのような意味があるだろうか。

いつの頃からか、“安産”という言葉は流行らなくなってしまった。今、主流なのは“いいお産”という言葉である。マタニティ雑誌や育児雑誌、インターネットには、“いいお産をしたい”、“いいお産だった”、“もっといいお産を”という言葉であふれている。概念分析をしたわけではないが、“いいお産”の言葉にはおおよ「主体性のある姿勢で臨んだお産」とか「満足のいく出産体験」といった意味合いがあると思われる。私はこの、“いいお産”という言葉は罪作りだと思っている。

「主体性」も「満足」も、抽象的で主観的、かつ状況に左右されやすい概念である。そのため、実際に出産を体験してみないことには具体的にどういうことなのかが分からない。さらに、実際に体験しても主体的な姿勢だったとか満足のいくものだったかということは誰からも保証されない。このような状況におかれる妊産婦がお産に不安を覚えても不思議はない。まるで透明のゴールラインを示されて、長距離マラソンを